

夏休みおすすめ図書 ～小学校3・4年生向け～

「フラガールと犬のチョコ 東日本大震災で被災した犬の物語」

祓川（はらいがわ） 学 // 作 かなき 詩織 // 絵 ハート出版 645ハ

原発事故で緊急避難させられた福島の町。置き去りにされた動物たちの中に、“フラガール”の愛犬・チョコもいたのです…。多くの人たちを悲しみのうず巻き込んだ東日本大震災を通じて、人間と動物の“きずな”を描いたお話。

「海をわたったヒロシマの人形」

指田 和 // 文 牧野 鈴子 // 絵 文研出版 Eマ

広島市の平和祈念資料館を訪れた筆者は、展示している真っ赤な着物を着た人形に目を留めます。この人形は、終戦後アメリカ兵が広島市内で拾い、帰国後に知人女性に贈られ、60年間大切に保管されたのです。

この事実を知り、実際に筆者が人形を保管していた女性に会いに行くという実話を描いた話です。

「だいすきだよ、オルヤンおじいちゃん」

カミラ・ポルイストレム // 作 石井 登志子 // 訳 徳間書店 949ボ

8才のオルヤンは、おばあちゃんがいる老人ホームで自分と同じ名まえのおじいちゃんと出会う。足がわるくて外に出られないおじいちゃんを、オルヤンは車いすに乗せて連れ出す…。男の子とおじいちゃんの交流と別れを描く。

「みさき食堂へようこそ」

香坂 直 // 作 北沢 平祐 // 絵 講談社 913コ

あなたが食べたかったあの料理、作ります! みさき食堂は、ちょっとふしぎな食堂です。食べたいものがあるけど、わけがあって食べられない人が、ときどきやってきて…。心がやわらかくなる物語。

「わたしたち手で話します」

フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク // 作 フェレーナ・バルハウス // 絵
あかね書房 Eバ

耳の不自由なリーザに、子どもたちが声をかけてきた。でも、リーザにはわからない。そこへ男の子が現れ、手話で伝えてくれた…。わかりやすい絵と文章によって、耳が不自由な人の世界を教えてくれる絵本。

「うわさごと」

梅田 俊作 // 文・絵 汐文社 Eウ

広島からの転校生ケンゴ。彼の親は原爆で亡くなっただけ。まわりのみんなは、「ゲンシ病はうつる」って言っているけど、本当だろうか。うわさから生まれる差別について考える1冊です。

「山のいのち」

立松 和平 // 作 伊勢 英子 // 絵 ポプラ社 Eイ

無口で学校も休みがちな静は、祖父の家で夏休みを過ごすことになります。ある日、飼っていたニワトリを殺したイタチを捕まえた祖父は、静の前でイタチを殺し、自分たちが食べる魚を捕るための道具を作りはじめます。第37回の課題図書です。

「いつか帰りたいぼくのふるさと 福島第一原発20キロ圏内から来たねこ」

大塚 敦子 // 写真・文 小学館 645才

福島県大熊町で生まれ育った猫のキティ。東日本大震災で家族とはぐれ、ボランティアの人に引き取られます。ようやく家族と再会したものの、故郷にはまだ戻ることができません。原発事故で避難している人々の現実を知ることができる1冊です。

「はりねずみのルーチカ」

かんの ゆうこ // 作 北見 葉胡 // 絵 講談社 913カ

フェリエの国には、はりねずみのルーチカをはじめ、もぐらのソル、てんとうむしのニコなど、たくさんの不思議な生き物たちが住んでいます。ある日、ルーチカとソルは森へ出かけるのですが……。

「エルマーのぼうけん」

ルース・スタイルス・ガネット//作ルース・クリスマン・ガネット//絵

わたなべ しげお//訳 福音館書店 933ガ

ある冷たい雨の日に、年をとったネコに会ったエルマー。彼はそのネコから、どうぶつ島にとらえられているかわいそうなりゅうの子の話を聞きます。勇敢なエルマーは、りゅうの子を救うため、旅にでかけることに-

「夕ごはんまでの五分間」

プロハースコヴァー//作 ポコルニー//絵 平野 卿子//訳 偕成社 943ブ

夕ご飯ができるまでの待ち遠しい5分間で何かお話が聞きたい、それもお父さんとお母さんの出会い、お父さん・お母さんと自分との出会いについて聞きたいとせがむバベタ。そこでお父さんは、5分間で終わるよう、「本当に大切なこと」だけを話しはじめた。“家族である”“親である”ということについて、また私たちが“当たり前”と思っていることの新しい考え方について、様々なことを提示してくれる5分間の物語。

「アルプスの少女」

スピリ//作 岩崎書店 943スS J

ハイジはスイスの高山で祖父（アルム）と一緒に生活している。ハイジは友人ペーターと一緒に、山での生活を送る。その後ハイジは、病気のため立つことができないクララのために都市へ行くのですが・・・。

「星の王子さま」

サン・テグジュペリ//作 岩波書店 953サ

サハラ砂漠に不時着した「ぼく」。翌日1人の少年と出会い、話すうちに「ぼく」が小惑星から来た王子であることを知ります。その後キツネやヘビなどに出会うのですが、別れ際に、王子は「大切なものは、目に見えない」という「秘密」をキツネから教えられ・・・。

「オレンジソース」

魚住 直子//著 西田 多希//絵 佼成出版社 913ウ

みさきのクラスの松本さんは、オレンジソースってあだ名のクラスのきらわれ者。でも、あるとき、みさきは松本さんの家であそぶことになって、松本さんが、みんなに誤解されていることに気がつく。でも、クラスの中では、松本さんに声をかける勇気がなくて…。

「わらうきいろオニ」

梨屋アリエ//作 こがしわ かおり//絵 講談社 913ナ

きいろオニはひとりぼっちだったので、にんげんの子どもの通う学校に行ってみました。きいろオニがお手玉をしてみると、こどもたちがよってきましたが、「きいろオニなんてヘンなの」と言われてしまいます。きいろオニはいっしょうけんめいみんなに気に入られるために、つらいことやイヤなことをさせられても、楽しそうにわらっていました。するとだんだんおなかが重くなってきて…。
☆ほんとうの自分を好きになれる本です。

「おかし」

なかがわ りえこ//文 やまわき ゆりこ//絵 福音館書店 596ナ

おかしが大好きな男の子・なおきくんは小学3年生。食べるのも、考えるのも、作るのだって楽しみです。

おかしには、魔法のような「ちから」がたくさんあります。

勉強やお手伝いにやる気がでるし、しあわせな気持ちにしてくれる。たとえケンカをしたとしても、仲直りだってできちゃう……。おかしの役目、いろいろなパワーを紹介します。☆『ぐりとぐら』でおなじみのコンビで書かれた作品です。

「あたらしい子がきて」

岩瀬 成子//作 上路 ナオ子//絵 岩崎書店 913イ

みきとるいの姉妹のもとに、けんという赤ちゃんがやってきます。赤ちゃんがやってくると、お父さん、お母さん、おばあちゃん、みんながけんの事ばかり。“あたらしい子”ではないみきとるいは、なんとなく居場所がありません。

ある日、みきとるいは公園で、おじさんと知的障害のあるおばさんの姉弟に出会います。また、手に障害をもつ大おばあちゃんの姉妹。2組の“きょうだい”を通して成長し、徐々に弟のけんを受け入れていきます。

「ひまわりのおか」

ひまわりをうえた八人のお母さんと葉方 丹//文 松成 真理子//絵 岩崎書店 Eマ

2011年3月11日、津波が宮城県の小学校を襲い、子ども74人と先生10人の命を奪いました。わが子をなくしたお母さんたちは、子どもたちが避難しようとした場所へ、ひまわりを植えはじめた。ひまわりの成長に重なるのは、亡くなったわが子……。お母さんたちのわが子へあてた手紙やお話をもとにした絵本。

「いつでも会える」

菊田 まりこ//作 学研 EキM

ぼくはシロ。大好きなみきちゃんの犬。

突然みきちゃんが亡くなってしまいます。会いたくて会いたくて悲しむシロですが、「目をつむると、みきちゃんのことを考えると、いつでも会える」という犬の目線から書かれた感動の絵本です。

「さみしかった本」

ケイト・バーンハイマー//文 クリス・シーバン//絵 岩崎書店 Eシ

図書館に入った、ある新しい本。最初はたくさんのおもたちに借りられ、予約で順番待ちになるほどでした。そのうち本は あちこち傷みだし、しばらくすると本棚から動くことはなくなりました。ところがある日、小さな女の子がこの本を見つけ、何度も繰り返し読んでくれたのです。こんなに大事にされて、本はとてもしあわせでした。

「消えたオリンピック・ランナー 金栗四三ものがたり」

佐山 和夫//原案 桜咲 さくら子//作 和絵//絵 潮出版社 Eキエ

オリンピックの陸上競技種目の中で、日本人の活躍が期待される競技の一つに、マラソンがあげられますね。日本人初のオリンピック選手として、マラソン競技に出場されたのが金栗四三です。1912年（明治45年）ストックホルムオリンピックに黒足袋で参加した金栗選手は、外国人選手との体格の差や実力、シューズの違いに驚かされました。こうした教訓をもとに、日本のマラソン界、スポーツ界の発展のためにその生涯を捧げた彼の物語です。

「りんごの花がさいていた」

森山 京//作 篠崎 三朗//絵 講談社 913モC

小さな家に住むおばあさんが死んでしまいました。悲しい知らせを聞いて息子のサブロは大急ぎで戻ってきます。サブロはかあさんのかたみとして木のいすをもらいます。

すれ違う人たちにはやしたてられながらも、サブロはいすを背負って工場にもどりますが、工場から追い出されてしまいます。歩き疲れたサブロはいすにもたれかかって木の下で眠ってしまいます。そこで一人の娘さんと出会います。サブロは娘さんの家で働くことになり、りんごの花が咲くころ娘さんと結婚しました。

いすは「かあさんのいす」と呼ばれるようになりました。

そのいすのあるところ、かあさんもいっしょです。

そのいすのあるところ、ぬくもりがうまれます。

かなしみはよろこびに、くるしみはやすらぎに。

そのいすがあるところ、しあわせはにげません。

「ぼくとあいつのラストラン」

佐々木 ひとみ//作 スカイ エマ//絵 ポプラ社 913サ

大好きなジイちゃんのお葬式の日。ぼくのまえにあらわれたあいつはニヤニヤわらってこういった。「おい、走ろうぜ」…。大切な人との永遠の別れが優しく描かれています。
～凝縮した時間の中に、伝えたいことがたくさん詰め込まれている1冊です～

「またおいで」

もりやま みやこ//作 いいい つとむ//絵 あかね書房 913モC

お父さんを待つウサギの子に出会ったキツネの子。目に涙をいっぱいにためたウサギの子を励ましたくて、キツネの子はあることを提案しますが…。

★手を洗う時にも大事なハンカチを使わなかったキツネの子ですが、泣いているウサギの子のためにハンカチを貸してしまいます。

小さな出会いを描く、あたたかなお話です。

「木いちごの王さま」

サカリアス・トペリウス//原作 岸田 衿子//文 山脇 百合子//絵
集英社 949トC

主人公のテッサとアイナは、木いちごを洗っていると、虫がついている木いちごを見つめます。お姉さんや弟は「はらい落として!」「ふみつぶしちゃえ!」と言いますが、テッサは、葉っぱの上にのせ、すずめに食べられないようにやぶの中にかくしてあげました。

お昼ご飯の後、テッサとアイナはかごを持って、森の奥へ奥へとすすんで行くと、大きな木いちごのしげみを見つけました。その木は見たこともない、大きな木いちごの実をたくさんつけていました。この後二人は家に帰ろうとしますが、迷子になり、不思議な体験をします。★やさしい心や小さな命の大切さ、思いやりを感じる物語です。

「ルリユールおじさん」

いせ ひでこ//作 理論社 Eイ

ルリユール、という職業を知っていますか?

400年ほど前のフランスで登場した、劣化した書物を綴じなおしたり、仮綴じの本を装丁したりする人のことです。

ソフィーという女の子が、こわれてしまった大事な図鑑を直してもらえる人を探しているうちに、“ルリユールおじさん”のことを教えてもらいます。

やっとルリユールおじさんを見つけたソフィーは、おじさんの仕事をみながらいろいろな話をします。おじさんは本を直しながら、自分にこの仕事を教えてくれた父親のことを思い出していきます。何日かたって出来上がった本は、素晴らしい、ソフィーだけのオリジナルのものになっていました。

ちょっとかみ合わない二人の話にクスツときたり、おじさんの人生に思いをはせてみたり、とても味わい深い絵本です。

「L i f e」

くすのき しげのり//作 松本 春野//絵 瑞雲舎 Eマ

ある小さな町に『L i f e (ライフ)』というお店がありました。店員がいないそのお店では、欲しいものを見つけたら、かわりに自分のものを置いていきます。

寒い冬の日、おばあさんは、亡くなったおじいさんが育てた花の種を置いていきました。次にやってきた男の子が、その花の種を見つけると・・・。

お店の品物を巡って、お客さんの様々な人生が見えてくる、優しい気持ちになれる1冊。

「目の見えない子ねこ、どろっぴ」

沢田 俊子//文 講談社 913サ

つぐみの家に迷い込んできた子ねこは、病気で目がつぶれかかっていた。子ねこを助けるためには、手術で目玉をとらなければなりません。しかし、つぐみの家にはすでに3匹の猫がいて…。

自分の意見を言えなかったつぐみが、子ねこから勇気をもらい、成長してゆく姿が描かれています。

「森のプレゼント」

ローラ・インガルス・ワイルダー//作 安野 光雅//絵 朝日出版社 933ワ

クリスマスが近づきました。ローラの家は、雪の壁でかこまれました。お父さんは、クリスマスプレゼントを大きな板をけずって作りはじめました。お母さんへの飾り棚を作っているのです。……森の中の小さな家、家族に心のこもったプレゼントを贈るクリスマス。アメリカ西部にある、大きな森の小さな家の心温まる物語に、安野光雅さんの素敵な絵が描かれた一冊です。

物がたくさんある今の暮らしの中で、何が大切なのか、考えることができます。

「ふたりユースケ」

三田村 信行//作 理論社 913ミ

ぼくは小川ユースケ。山に囲まれた町に引っ越してきた。その町の伝説の神童だったという『大川ユースケ』という子にそっくりなんだって！大川ユースケは、2年前に川で溺れた。ぼくは、その子の生まれ変わりだと騒がれた。ぼくがだれに似ていようと関係ないのに…。最初は気にしないユースケだった。でも、だんだん周りのペースに巻き込まれてしまい自分を見失ってしまう。二人のユースケとそれぞれの家族の物語。

「金色のキャベツ」

堀米 薫//作 佐藤 真紀子//絵 そうえん社 913ホリ

風香は塾や習い事に追われる都会の小学生。日々の生活に嫌気がさしていた。明日から夏休みなのに予定はぎっしり。風香は両親に黙ってキャベツを作っているおじさんのもとへ出かけた。そこでキャベツ作りで生きているたくさんの人と出会う。キラキラと輝く瞳と汗。朝焼けの風景。今まで体験したことのない世界が…。主人公が心も身体も豊かになって成長していく物語です。

「八月がくるたびに」

おおえ ひで//著 篠原 勝之//絵 理論社 913オオ

1945年8月9日。この日に何があったか分かりますか？最近8月15日が何の日かも分からない若者もいるそうです。戦後72年、戦争の悲惨さの記憶は薄れてきています。平和であることの証明かもしれません。ですが、平和な世の中は誰が守っているのでしょうか。8月9日は世界で2番目に、長崎県のうらかみの町に原子爆弾が落とされた日。そして、8月15日は終戦記念日です。

本書は、原爆で母親やその時は大丈夫だった兄やおじいさんを失った女の子の物語です。女の子も大きなやけどを負いました。平和を守るためには、戦争の悲惨さを知ることから始まると感じさせる一冊です。

「がらくた学級の奇跡」

パトリア・ポラッコ//作 入江 真佐子//訳 小峰書店 Eガラ

トリシャは、新しい学校でむかえる新学期、自分が「がらくた学級」と呼ばれるクラスに入ることにショックをうけます。でも、クラスの担任のピーターソン先生は「がらくたにはすばらしい可能性があるのよ!」と言います。クラスメイトは、みんなどこか変わっていますが、トリシャたちは夢を実現するために…。

★「ありがとうフォルカー先生」に続く作者のポラッコさんの自伝的作品です。大人も、子どもも、ぜひ読んで、もらいたい一冊です。

「ラスコーの洞窟 ぼくらの秘密の宝もの」

エミリー・アーノルド・マッカーリー//絵と文 青山 南//訳 小峰書店 702マ

1940年、第二次世界大戦が始まり、ドイツ軍がパリを占領しました。そんな頃、フランス南部モンティニャックに住むジャックたち少年3人は、年上のマルセルに誘われて、ある木の根元に現れた深い穴の中を探検することに…。それは昔、この辺りに住んでいた貴族が隠したと言い伝えられる宝物を探すためでしたが、そこで彼らが見つけたものは!

☆美しい絵と文章でつづられているノンフィクション絵本。旧石器時代の人びとが遺した宝物、ラスコーの洞窟壁画が発見された物語です。

「ウェズレーの国」

ポール・フライシュマン//作 ケビン・ホークス//絵

千葉 茂樹//訳 あすなろ書房 Eホ・ウエ

友達のいない少年・ウェズレー。彼は夏休みの自由研究に、自分だけの文明をつくることにした。庭にとんできた種から、自分だけの作物を育てて、自分だけの服を作り、独自の遊びを考えだして、自分だけの時間も決めた。なにからなにまで新しい名前をつけて、「ウェズレー語」まで発明した。

人からどう思われようと、やりたいことをやり、自分を信じてまっすぐ突き進む。誰よりも「自分」であることを楽しんだ、ひとりの男子の子の壮大な物語。

「世界でさいしょのプログラマー」

フィオナ・ロビンソン//さく さくせな あいこ//訳 評論社 Eセカ

世界でさいしょのコンピュータがつくられる100年まえ、コンピュータのプログラムを考えた女性がありました。この本は、その女性、エイダ・ラブレスのものがたりです。イギリスの代表的な詩人バイロンと、数学者のお母さんの間に生まれ、数学を勉強した彼女は、想像力と知識をむすびつけて「世界最初のコンピュータ・プログラマー」と呼ばれる人生を歩んでいきます。100年後のコンピュータ研究者を驚かせたエイダはどんな女性だったのでしょうか？

「しあわせな動物園」

井上 夕香//作 葉 祥明//絵 国土社 913イ

カトちゃんは動物園の飼育員で、不思議な力を持ったハツカネズミのタイサンボクと暮らしています。カトちゃんは、ゾウのマシューアの担当をしています。一生懸命に世話をしますが、なかなか思うようにいきません。エサを食べなかつたり鼻で追い払われたり、水をかけられたりするのです。なぜそんなことをするのでしょうか。マシューアは小さいころにとっても悲しい出来事があり、心を閉ざしてしまっていたのです。タイサンボクは、マシューアの心を開こうと、ある行動を起こします。そして…。

「ムーミン谷の彗星」

トーベ・ヤンソン//作・絵 講談社 949ヤン

作者のトーベ・ヤンソンは、フィンランドの首都ヘルシンキに住むスウェーデン系フィンランド人で、普段はスウェーデン語で話すそうです。世界的に有名なムーミンシリーズは、もともと社会風刺として描かれていたそうです。「ムーミン谷の彗星」は、赤い彗星が地球に衝突するのではないかとムーミン谷のみんなが大騒ぎするお話。いろいろな生き物が魅力的な、正統派のファンタジー。

「星の王子さま」

サン=テグジュペリ//作 内藤 濯//訳 岩波書店 953サ

星の王子さまは、いろいろな星を旅して、いろいろな人やものと出会います。王子さまは、いろいろ考えて、星々でいろいろと対話します。それは、しばしば哲学にも通じる趣きを感じさせます。「かんじんなことは、目に見えないんだよ」「星があんなに美しいのも、目に見えない花が一つあるからなんだよ」「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ」言葉ひとつひとつに、はっとさせられます。

「ピippi 南の島へ」

アストリッド・リンドグレーン//作 イングリッド・ヴァン・ニイマン//絵 菱木 晃子//訳 岩波書店 949リ

ある小さな町に、『ピippi・ナガクツシタ』という名前の子どもの女の子がいます。ピippiは、世界一強く、おもしろく、とても行動力があり、町の子どもたちの人気者でした。

そしてピippiは、お父さんがいる南の島へ友達と行きます。南の島では、どんなことが起こるのか？ピippiのおはなしの始まりです。

「ピippi 船にのる」

アストリッド・リンドグレーン//作 イングリッド・ヴァン・ニイマン//絵 大塚 勇三//訳 岩波書店 949リ

世界一強い女の子、『ピippi・ナガクツシタ』。9才です。ピippiは、とても力もちで馬も持ち上げてしまいます。空想やほら話を思いつき、おしゃべりで活発です。友達と探検にいたり、遠足をしたり。ある日、ピippiは船長のお父さんと町を出て行ってしまいますが…。

「魔法のたいこと金の針」

茂市 久美子//作 こみね ゆら//絵 あかね書房 913モ

町はずれの「平井洋装店」と看板がかかった仕立て屋さんに、雪の降る夜、パンツだけはいた男の子がはだしてたっていました。その男の子は、もじゃもじゃの頭をして、その頭には小さなつのがはえていたのです。

たいこのかわがやぶれてしまったという男の子に平井さんは…。不思議な針のおはなしのはじまりです。

「せかいいちのねこ」

ヒグチ ユウコ//絵と文 白泉社 913ヒグ

男の子のぬいぐるみである‘ニャンコ’。彼が大きくなって一緒にいたいと願ったニャンコは、本物のねこになるために必要な‘ねこのヒグ’探しの旅に出ます。そこで出会う本物のねこたちは、後にニャンコを助けてくれることに…。

愛し、愛されることの大切さ。家族、友達、仲間、身近な人のあたたかい部分を思い出させてくれる、心に響くおはなしです。

「キノコのカミサマ」

花形 みつる//作 鈴木 裕之//絵 金の星社 913ハ

主人公タケオは夏休みを利用して、キノコ研究のため単身赴任中の父に会いに来た。そこで、自分にしか見えない、カミサマと名乗る年齢不詳の男に出会う。

村の人たちが森でみつけた変わったキノコ。まさかカミサマの仕業？

カミサマって一体何者なんだ…？

「大きなたまご」

オリバー・バターワース//作 松岡 享子//訳 岩波書店 933バタ

ほんのちっぽけな町。めんどりがすごく大きなたまごを産みました。もちろんみんなびっくり。たまごからなにがかえるか、ネイトは、めんどりがたまごをあたためられるように、世話をして忙しいです。そして、ついにたまごからある生き物が！

ネイトの目線で書かれているので、共感出来ると思いました。

「時間をまきもどせ！」

ナンシー・エチメンディ//作 吉上 恭太//訳 杉田 比呂美//絵 徳間書店 933エ

森で出会った不思議な老人に、失敗を取り消すことができる機械〈パワー・オブ・アン〉を手渡されたギブ。なぜ、ぼくに？

その夜は、親友と移動遊園地に行くことになっていたギブ。妹のロキシーも連れて行くように言われておもしろくない。

家族愛、友情、時間の不思議を描いた物語。もしもタイムトラベルができれば…！！空想の世界が広がります。

「ハニーのためにできること」

楠 章子//作 松成 真理子//絵 童心社 913ク

いなかの町で、ひとりで暮らしていたふたばのおばあちゃんが急に亡くなり、飼っていた老犬のハニーだけが残されてしまいました。ふたばはお母さんに反対されるとわかっていながらも、「ハニーを飼いたい」と声を震わせ勇気をふりしぼって言いました。そんなふたばの姿を見て、お母さんは「連れて帰ろう」と言ってくれました。しかし、ハニーには重い病気が見つかってしまいます。動物病院の先生と相談しながら、ふたばは家族とともに、ハニーを看病していきますが…。

家族愛、そして命について考えさせられる、感動の一冊です。

「バイバイ、わたしの9さい！」

ヴァレリー・ゼナッティ//作 伏見 操//訳 ささめや ゆき//絵
文研出版 953ゼナ

もうすぐ10さいのたんじょう日をむかえるタマラ。9さいまでとはちがう自分の変化を発見しようといろいろ試みてみますが、なかなか答えが見つかりません。そんなある日、新聞でこんな言葉を見つけました。「世界では、4秒にひとりが、飢えで命をうしなっています。」テレビのニュースでも、世界中の不幸がたくさん話題にのぼっていました。いてもたってもいられなくなったタマラは、自分が大統領になって世界を変える計画を立てるのですが…。ひとりの小さな力にこめられた決意とその可能性に、期待でワクワクさせられるお話しです。

「わけあって絶滅しました。〔正〕」

世界一おもしろい絶滅したいきもの図鑑

丸山 貴史//著 今泉 忠明//監修 サトウ マサノリ//絵
ウエタケ ヨーコ//絵 ダイヤモンド社 482マ

地球に生命が生まれて、およそ40億年、その間いくつもの生命が生まれては絶滅してゆきました。その理由もそれぞれで、「隕石」や「地球の環境変化」よるものは直ぐ思いつくでしょうが、意外な原因で絶滅した生命も数多くあります。この本では、その意外な理由で絶滅した生き物たちが数多く紹介されております。「無敵すぎて」「美しすぎて」「風が吹かなくなつて」など、イラストやデータで面白おかしく載っていますので、親子で楽しむのも良いかと思ひます。

「ぼくのなかのほんとう」

パトリシア・マクララン//作 若林 千鶴//訳、たるいし まこ//絵
リーブル 933マク

主人公ロバートの両親は音楽家。ロバートはひとりっ子。そのため、両親は動物施設から犬をもらってくれた。犬の名前はエリー。ロバートの一番の親友になった。夏休みは両親がコンサートのため2か月もの間演奏旅行に行く。その間ロバートは祖母マッディの家で過ごすことになる。マッディの家で過ごす間に会う人々や動物と触れ合うことで、「ぼくのなかのほんとう」に気づいていく。

「ミサコの新爆ピアノ」

松谷みよ子//文 木内達郎//絵 講談社 913マツ

ミサコが四つになったとき、おとうさんが自分のオートバイを売って、ピアノを買いました。ミサコはピアノが大好きで、仲良しのフミコちゃんといつもいっしょに夢中でピアノをひきました。やがて小学校四年生になった時に戦争がはじまりました。ミサコも兵器を作る工場で働くようになります。そして1945年8月6日に原子爆弾が投下され…。ミサコとピアノの運命は…?

「紙ひこうき、きみへ」

野中柊 // 作 木内達朗 // 絵 偕成社 913ノ

ひゅうっと風に乗って、何かが飛んできて、こつん。シマリスのキリリの頭に当たりました。それは旅が好きなミケリスのミークが飛ばした青い紙ひこうき。その青い紙ひこうきがきっかけで、キリリとミークは友達に。

ところがある日、「もういかなくちゃ」とミークが言ったのです。

そして、ミークはリュックサックから小さなハサミをとりだして、ちきちきっ！

なにをしようとしているのかな…

青い紙ひこうきがつなぐ心温まる物語です。

星 新一 ショートショートセクション①

「ねらわれた星」

星 新一 // 著 和田 誠 // 絵 倫理社 913ホ

台風の被害にあった村はずれの社のあとに、1メートルぐらいの穴を村人がみつけました。キツネの穴かと思い「おーい、でてこーい」と叫んでみたが何の反響もないので石コロを投げてみました。その後は、原子炉のカスからあらゆる汚物を穴に投げ捨て都会の汚れを洗い流したようにみえましたが、ある日空から「おーい、でてこーい」と叫び声が聞こえ石コロが落ちてきました。

短い物語の中に、奇想天外などんでん返しがまちうける星先生のショートショート、納得することが多くとても楽しめます。

「先生、しゅくだいをすれました」

山本 悦子 // 作 佐藤 真紀子 // 絵 童心社 913ヤC

4年2組のゆうすけくんは、しゅくだいをわすれて、すぐにばれるウソをつきました。すると、えりこ先生は「ウソをつくなら、ばれないようなので、それを聞いた相手が楽しくなるようなのじゃなきゃね!」と言います。

上手にウソがつけたら、しゅくだいやらなくてもしかられない。それからしゅくだいをすれたい子が次々と出てきました。さて、先生はどうするのでしょうか?

「おもちゃ屋のねこ」

リンダ・ニューベリー // 作 田中 薫子 // 訳
くらはし れい // 絵 徳間書店 933二

ある日のお昼どきから、ハティの大おじさんのおもちゃ屋に緑色の目をしたねこが居着きはじめました。

ハティは、きりっと光る緑の目を見るなりすぐに気に入ります。そして名前も「クルリン」と自分でつけました。

その日から、おじさんのおもちゃ屋ではふしぎなことがおこるようになります。

昔から、「ねこには不思議な力が宿っている」と言われていますが、クルリンにも、何か人の心をつかむ秘密があるみたいですね。

「先生、感想文、書けません!」

山本 悦子 // 作 佐藤 真紀子 // 絵 童心社 913ヤ

「だって、書けないんだもん。」

「わたしには、感想文、むり!」

夏休みの登校日、三年生のみずかはクラスで一人、読書感想文を書いていきませんでした。

図書館で借りた本も読んだのですが、はたして?

「介助犬チェリーのパピーウォーカー」

山口 理 // 作 岡本 順 // 絵 文研出版 913ヤ

小学校 4 年生の風太は、車いすのおじさんとその介助犬チャックの様子を見て、介助犬についていろいろと調べてみることにしました。すると「パピーウォーカー」という、介助犬になる予定の子犬を約 1 年間大切に育てるボランティアがあることを知ったのです。そして風太はパピーウォーカーになりたいと言い出しますが、風太は今まで習い事など何でも途中でやめてしまっていると家族から指摘されてしまい…。

子犬のチェリーと共に成長していく風太とその家族の物語です。